

# 書評 野間文史著『春秋左氏伝 その構成と基軸』

(研文出版 二〇一〇年 四百十六頁)

竹内 航治

『左伝』を読むことは難しい。この膨大な分量の書物は様々な性格を持った事件の記述を含み、それを記す文体は時に雑多と評されることがあるほど多様である。しかも『春秋』の紀年の下に一連の事件が分断され、読者はその流れをたどるのに苦労することになる。そして『左伝』を論じようとする者は、この面倒な書物の「どこ」を「どのように」論じるべきかという問題を常に突きつけられる。『左伝』の研究は数多いとはいえ、この問題について意識し、明確な形で提示してから論を進める研究は必ずしも一般的ではないように思われるのだが、本書はその問題に真正面から取り組んでおり、評者が考える本書の重要性はまずそこにある。

本書の著者である野間氏は中国哲学の研究者であり、本書

も一般的には中国哲学分野における著作として扱われるものである。評者は中国文学を専門としている者であり、中国哲学についての知識は不十分である。にも関わらず本書の書評をするのには理由がある。それは、哲学のみならず中国文学においても『左伝』は重要な書物であると思われるのに、少なくとも日本においては文学の立場からの研究はほとんど手つかずであるが、そのような状況にあつて本書は文学的立場から『左伝』を読もうとする者にも示唆を与えてくれると信じるからである。本書評では、本書について章ごとに内容を紹介しつつ、著者が提起した問題のいくつかについて少し考えてみたい。

まず本書の目次を掲げておく。

第一章 左伝研究序説

第二章 左伝の多元世界

第三章 覇者の時代（一）晋文公

第四章 覇者の時代（二）斉桓公

第五章 大戦の時代・鄆之役・

第六章 賢大夫の時代（一）鄭の子産

第七章 賢大夫の時代（二）叔向・晏嬰・叔孫豹・公

子札

第八章 結びと参考文献

あとがき

第一章では、『左伝』の原史料の一つに演劇を想定するという仮説が提唱される。これは、『左伝』に関するパートン・ワトソン氏の論文（「左傳の書きかた―その文學的側面について―」『中國文學報』第七冊 一九五七年）と、『史記』に関する宮崎市定氏の論考（「身振りと文學―史記成立に關する一試論―」『中國文學報』第二十冊 一九六五年など）

を受けて述べられたものである。著者が出发点としているのは、晋と楚の間で行われた大戦「鄆陵之役」における楚王と伯州犁の間答である（成公十六年）。戦いに先立ち、楚王が晋軍の陣營を望み見、傍らに控えた伯州犁に敵の動向について逐一問いを發するという場面である。この場面について『左伝』の原文と、著者が付した訳文をまず引いてみたい（原文の太字および訳文の〔〕内の注釈は著者によるもの）。

楚子登巢車、以望晋軍。

子重使大宰伯州犁侍于王後。

王曰「聘而左右、何也」。

曰「召軍吏也」。

「皆聚於中軍矣」。

曰「合謀也」。

「張幕矣」。

曰「虔卜於先君也」。

「徹幕矣」。

曰「將發命也」。

「甚盪、且塵上矣」。

曰「將塞井夷竈而爲行也」。

「皆乘矣、左右執兵而下矣」。

曰「聽誓也」。

「戰乎」。

曰「未可知也」。

「乘而左右皆下矣」。

曰「戰禱也」。

伯州犁以公卒告王。

楚子「楚成王」は樓車ろうしや「やぐらを組んだ車」に登って、晋

の陣中を遙かに望んだ。

子重が大宰伯州犁はくしゅうりを、王の背後に控えさせた。

王がたずねる。

「晋の兵車が左に右にと駆け回るのは、何をしているのじや」

「軍吏を召集しているのでございます」

「あれあれ、全軍が中軍に集まりおったぞ」

「申し合わせをしているのでございます」

「幕を張ったぞ」

「先君の靈に吉凶を卜っているのでございます」

「あれ、幕を取り除いてしまった」

「これから軍へ命令を申しわたすところでございます」

「ひどく騒がしい。それに土埃つちぼろが上ったぞ」

「井戸を塞ぎ竈かまどをつぶしてこれから隊列を組もうとする

ところでございます」

「あれ、全員車に乗ったが、御者以外の者は武器を手にし

て下りてしまった」

「軍令を聴くためでございます」

「もう戦うつもりか」

「まだわかりませぬ」

「左右の者が乗車したが、また御者以外は下りたぞ」

「戦勝を神に禱いのるためでございます」

伯州犁は以上のように晋侯の部隊の状況を楚王に告げたのである。

著者が扱ったバートン・ワトソン氏もこの場面を取り上げている。ワトソン氏は、「この所の文は問答式になっているが、普通の「問曰」や「對曰」等の對話と對話との間の敘述

が全くないから、實に妙な書き方である。併し意味が解れば大變劇的な、面白い文である」と述べ、『左伝』の戦争の場面はシェークスピア劇の戦争の場面と同じ様な印象を與える」という。ワトソン氏によると、シェークスピア劇は当時の

劇場舞台の狭さが原因で戦いの場面では大勢の役者が登場せず、二三人によるこぜり合いが何度か繰り返されるのだという。ワトソン氏は「印象」の問題のみに止めているが、『史記』の取材源の一つに演劇を想定する宮崎氏の一連の研究(宮崎氏の想定する演劇の形態は、二人一組の掛け合いで行われる「偶語」を主なものとする)を受け、著者は『左伝』にも演劇に基づく部分が存在する可能性を述べる。そして「鄢陵之役」について、『春秋左氏伝評林』が引く徐揚貢がこの場面の助辞に言及していることに着目し、「何也」「乎」「矣」および「也」の使い分けによって、前者が楚王の問い、後者が伯州犁の答えであることが理解できる仕掛けがここには施されており、さらには一番初めに記した後は「王曰」を省くことよつて問答の緊迫感を表現することができたと説明している。さらに著者は、「鄢陵之役」の文章構成に類似したもので、楚王と伯州犁の問答のように緊迫感を伴った会話

の例は無いであろうか」という視点から、『左伝』が一人語りか「偶語」に基づいたと思われる例を四つ見つけ出している。そして、さらに人数が増えた大掛かりな演劇に基づいたと思われる例をも一つ挙げている。

著者はこの仮説を通じて、『左伝』の原史料は「史官」の記録として一まとめにできるものではなく、慎重な取り扱いが必要であると指摘する。著者は第二章以下で『左伝』の多彩な内容をいかに処理するかという問題に取り組むことになるが、内容の多彩さが史料の多様さによるものであるとまず提示するのである。

ところで、『左伝』が語り物に取材したという説は、高橋稔氏がかつて諸論考の中ですでに述べている(「史記」と歴史語りについて)『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』汲古書院、一九九一年「中国古代の語り物—漢代の歴史語り—『国語国文論集』第二十号、一九九一年など)。ただし、これらは『左伝』単体について論じたものではなく、主に漢代における語り物について論じる中で『左伝』についても触れたものである。

高橋氏は、戦国時代の燕の太子丹と刺客荊軻の物語である

作品「燕丹子」を語り物と見なし、その文体の特徴を分析している。高橋氏が「燕丹子」を語り物とする根拠は、同じく丹と荊軻のことを記す『史記』刺客列伝の贊にある。刺客列伝の贊は、この二人に関する誤った伝承が世間に流布していることを述べ、その内容を実際に引用しているが、高橋氏によればこれは当時行われていた語り物がわずかながらも引用されたものであり、その内容が「燕丹子」と一致する。そして「燕丹子」から伺うことのできる語り物の文体の特徴を次のようにまとめている（前掲論文「『史記』と歴史語りについて」）。

一、対話の部分と地の文との区別なく、同じ字数の句の繰り返し、特に一句四字、つまり四音節の句の繰り返しが多い。

二、同じ音節数で対応する各句の作句法は、平叙的な散文で普通に綴られる内容を同音節ずつに句切つて表した体の文体で著されている。

三、前記のような形で著された文体は、各句の音節数を揃え、読み上げたさいには非常に調子が良いのだが、平易な

表現の文章を字数を揃えて句切つただけの物なので、かえって通俗的な感じを強めている。この点、いわゆる駢体を意識した美文が、対句表現を重んじ、対応する句の表現が、それぞれの句毎に表現の完結性を見せているのとは明らかに違っている。

そして、『左伝』『国語』『尚書』などの古文獻にも、このような句作りが見えるとする。高橋氏は、『左伝』の中にも語り物をそのまま取り込んだ部分が存在すると述べるのであるが、残念ながら『左伝』におけるそのような例を詳細に引用し説明するということまでは行っていない。しかし、高橋氏のいう文体上の特徴が、野間氏の取り上げた『左伝』の場面に必ずしも適合しないことは了解できる。

野間氏は、シエークスピア劇や映画からの類推により、「緊迫感を伴った会話」という視点から『左伝』が語り物に基づいた部分を選び分けようとした。一方高橋氏は、当時歴史語りの文体というべきものが明確な形で存在していたとし、それを残された資料から割り出した上で、諸文献に記された語り物の痕跡を探し出そうとする。評者には、高橋氏が提示し

た語り物の文体上の特徴が妥当なものであるか判断しかねる。そもそも「燕丹子」が本当に語り物であるのか、仮に語り物であったとしても、この作品のみから語り物全体に共通する特徴を抽出できるのか、疑問を残さざるをえない。しかし、何らかの方法で文体上の特徴を見出した上で文献を調査するという方法自体は正当と認められるべきであろう。もっとも、現段階においてそれが可能であるか、評者に断言できる勇氣はない。

野間氏が本書で場面を選び出すのに用いた方法はいまだ印象論的なものであるし、助辞の使い方に關してもむしろ書かれた文章における技法というべきものであり、語り物と直接結びつくというわけではないだろう。評者としては、野間氏が提示したような会話の場面にこそ『左伝』の面白さがあると考え、それが演劇に拠ったとする仮説にも大いに魅力を感じるのであるが、この仮説が定説となるにはより厳密な検討が必要になると考えるのである。著者の意図をいささか踏み越えた所にまで立ち入ってしまったかもしれないが、その割に評者自身の見解を示したというわけでもないが、文学の立場から『左伝』を読もうとする者にとっても重要かつ困難な

問題が本書の初めにまず提示されたと思われるので、ここに付言したものである。

第二章では、『左伝』がいかにも多彩な書物であるかを確認し、『左伝』全体を眺めた上でその「中心」を探ろうという試みがなされる。著者は「多様性」「多元性」「重層性」という三つの観点から考察を進めている。

まず「多様性」とは、書物の文字数で端的に現されるものであり、他の経書や諸子に比べ群を抜いて多い『左伝』の文字数が確認される。

「多元性」とは、『左伝』の成立に關わる問題であり、『左伝』の原資料として春秋時代の各国で編まれた史書を想定する顧頡剛氏および小倉芳彦氏の見解が紹介される。具体的には、各国の史料に基づいて一つの形にまとめられた書物（顧氏はこれを「原本左氏書」、小倉氏は「古文左氏（伝）」と称する）が存在し、それが後に『春秋』に合わせて再編集され、編年体としての『左伝』が作られたとする説である。著者はこれらの研究を踏まえ、「列国それぞれが自国を中心に記述しているのだから、これに基づく『左伝』に多くの中心が存在することになるのは必然の結果である」と述べる。そ

して、現行の『左伝』を本来の形態に復元しようとする「紀事本末体」「諸国別体」の書物に触れつつ、『左伝』の記述を国別に分けて考察した上で『左伝』の作者（編纂者と呼ぶべきか）を定めようとする衛聚賢氏の研究を紹介している。

そして著者は、記事の中に複数の国に関する記述が含まれる場合、ある一国にそれを還元することは必ずしも容易ではなく、細心の読解が必要であることも、実例を挙げて指摘している。ところで、著者は顧氏と小倉氏の研究を紹介した後で「原本左氏書」ないし「古文左氏（伝）」として編纂された際に、編纂者には一元化の方向を目指してまとめる意図は有り、そしてそれはある程度成功しているのであるが、必ずしも十全に実現されているには見えないのである」と述べ、編年体の『左伝』と原資料の間にもう一段階を想定する両氏の説を是認しているようにも見える。ところが、第三章では各国の史書について触れ、「原資料を『春秋』の編年体に適合させるべく、年次別に分断して配置するというのが、『左伝』第一次の編集作業であったことが予想されるのである」と述べ（八十五頁）、「原本左氏書」「古文左氏（伝）」のような存在については言及していない。実は、著者自身の

見解は「あとがき」の中で簡単に述べられている。それによれば、著者は『左伝』を列国史記などを集めて初めから『春秋』の伝として著されたものとして考えており、その検討については他日を期すということである。本書は『左伝』編纂の過程に触れつつも、その全てを明らかにすることまでは目的としておらず、それをなすにはまた別に相当量の論考が必要となるだろう。しかし、第二章と第三章におけるこの食い違いは読者を混乱させるものであり、第二章の段階で著者の意見を附記するべきではなかったか。ここに指摘するとともに、この問題について著者の今後の研究を心待ちにしたい。

著者が挙げたもう一つの観点は「重層性」である。ここでは、小倉芳彦氏や平勢隆郎氏が行った、史料批判としての『左伝』の内容分類が紹介される。つまり、春秋時代の史料として比較的信用できる部分が先行し、それを解説する部分、さらにはそれらを批評する部分など、いくつかの要素が付加されていき現行の『左伝』が成立したとするものである。

以上見てきたように、著者は「多層性」「多元性」「重層性」という観点から『左伝』を振り返り、それを統一的に論じるのが容易ではないことを確認する。著者はその上で、『左

伝』の「重心」を見つげ出す方法を提示する。著者が使った方法は、文字数によるものである。『左伝』の記述を一年ごとに分けて使われている文字数を数え出し、それを棒グラフにする。そして特に多くの文字が当てられている年の伝文から、主要な事件や人物について抜き出し、目立つものには事件・人物を記すのに使われた文字数も求めている。その結果を概観して著者がまず指摘する第一の特色は、戦争記事に多くの文字が使われているということであり、それが春秋時代

の中期に偏っているということである。なかでも、春秋の大戦と称される「城濮之役」「鄆之役」「鄢陵之役」を記すのに特に多く文字が使われることを述べる。そして後期には、鄭の子産・晋の叔向・斉の晏嬰ら諸国の賢人に関する記述に多くの文字が使われており、グラフの最も顕著な山場はこれらの人物の活動時期に当たると述べる。著者はいう。「すなわち『左伝』の記述する重点が、戦争から賢人の言動へと移動していることが分かる。というよりは寧ろ『左伝』の記述の中心が賢人の言動にあると言つてよいのかも知れない。これを文字数から見た『左伝』の第二の特色として指摘したい」。さらに時代を遡り、春秋時代前期にあつては晋の文公

(重耳)の放浪譚に大戦の記述に匹敵する文字数が使われていることを指摘する。

著者は前中後期に分けて見た『左伝』の「重心」を次のようにまとめる。

前期 齊桓・晋文による中原の覇者体制を記述する

中期 中原の盟主晋と、南の大国楚との攻防の時代が三大戦を中心に記述されている

後期 鄭の子産を代表とする賢人政治家の時代を詳述している

これが著者が見出した『左伝』の「構成」であり、これ以降の章はこれら三つの「重心」の分析に当てられる。先の引用で分かるように、著者が『左伝』の「中心」と呼んで特に重要視するのが後期の賢人政治家の記述であり、第六章・第七章で詳細に論じられることになるのである。

著者が述べる「重心」は、それ自体は特に新しいものではない。三つとも『左伝』の重要な要素としてしばしば取り上げられてきたものであるし、それらに多くの文字が使われて



いるという指摘もされてきた。しかし、伝文一年ごとの文字数を調べ上げるといふ詳細な作業がなされたのは初めてのことでではないだろうか。もちろん、『左伝』の中の重要な要素の全てがこの方法で拾い出せるとは思えないが、著者もそれは承知の上であることが第八章に記されている。ある書物についてまず全体を眺めてその特徴を見つけ出すという当たり前の、しかし『左伝』に関しては必ずしも意識的に示されてこなかったステップを著者は示してくれたのであり、評者は大きな教えを受けた。

ただし一つ気になったことがある。著者のいう前期の特色のうち、晋の文公に関しては実際に文字数を挙げて述べられているのだが、斉の桓公については具体的には一切触れられていない。にも関わらずまとめでは「斉桓・晋文による中原の覇者体制」としてあるのはどういうことであろうか。もちろん斉の桓公は晋の文公と並ぶ重要人物であるが、文字数による方法を提示した以上はそれに基づいた指摘が必要ではないか。この点では議論が一貫性を欠いているように思われる。

第三章では、前章において確認した、『左伝』前期にあつて多くの文字を費やし記述される晋の文公について論じられ

る。まず、晋の記事が『春秋』に現れるのが遅れること、それに對して『左伝』では非常に早くから見ることが指摘される。著者によれば、『左伝』における詳細な晋の記述は獻公の時代から始まり、それ以前の事件として晋の本家と分家の争いがあるが、それは獻公前夜の出来事として記されている。その国内の争いについて、本書では『春秋』の紀年によつて分断されている『左伝』の記述を時系列順に並べ替える作業が行われる。著者の考えでは、『左伝』の原資料は『國語』のようなまとまりのある史話が時代順に並んだものであり、この原資料を『春秋』の編年体に合わせて分断し配置するのが『左伝』の第一次の編集作業ということである。この並べ替えは『左伝』の原資料を復元しようとする試みとして提示されているのである。その後、獻公時代の事件（これが後の文公の放浪の原因となる）から文公即位までを要約して取り上げ、これらに関しては『春秋』にも記載が見えるようになるものの、『春秋』の記事は『左伝』が記したものの頂点のみを記した断片的なものであること、ところが文公が覇業を完成させた「城濮之役」が起こった僖公二十八年以降では『春秋』に晋の記述が一気に増えるということが指摘され

る。そして、文公（重耳）の放浪譚の全文を訳で引用した上で、この放浪譚が内部で解決する伏線と、後の「城濮之役」で解決する伏線を多く含んだ、小説的な物語であると述べる。著者は詳細な紀年を第一次史料としての「列国史」の特徴と考えているが、この放浪譚に紀年がほとんど見られないことから、これを「列国史」とは異質なものと考えているようである（ただし、これがどのような資料に基づくのかということまでは明言していない）。著者によれば、晋に関して「城濮之役」以前のことをほとんど述べない『春秋』は、『左伝』の立場からすれば不備があり、文公の覇業を語るには彼の放浪譚を語る必要があった。『左伝』の中には、『春秋』が記すべきはずの事件を記していない理由を解説する「不書例」の一つとして、諸国から魯に事件が正式に報告されなかった場合はそれを『春秋』に記録しないとする説明がある。著者は、この説明が『左伝』と『春秋』を対応させるために『左伝』編纂者が用意した仕組みであるとし、これを「赴告例」と名付け、『左伝』の重耳放浪譚の中にも「赴告例」としての「不書例」が設けられていると指摘する。

その次に「城濮之役」以降の、文公と周王の関係を述べる

伝文が検討される。それによれば、『左伝』は文公の覇業のうち尊王の意図から出た行為を評価する一方で、文公が周王を狩りに呼び出したという行為については孔子の言葉を引きこめて非難をしている（僖公二十八年）。著者によれば、周王を頂点とする礼制を守ることを要請するのが『左伝』の立場であり、文公に対する評価の方法はそれを明確に示すものである。

第四章では、前章に続き覇者の一人である斉の桓公について論じられる。斉に関する『春秋』の記事は、晋に関するそれとは対照的にその初年から豊富に見えることを著者はまず指摘し、それにも関わらず『左伝』は桓公について文公ほど多くを語らないことを述べる。

桓公も、文公と同じく一度は亡命しながらも帰国して国君の位に就いた人物である。著者は桓公に関する『左伝』と『国語』『史記』などの記述を比較し、即位前の桓公を取り巻く人間関係に『左伝』がほとんど言及しないこと、即位後の覇業についてもごく簡潔な記述が続くことを述べる。著者によれば、桓公に関して初めて長文の伝文が用意されるのは、周王を補弼すべき諸侯としての立場を強調した管仲の言葉が

記されている僖公四年（桓公即位後二十九年）のことであり、その次が桓公が周王より祭物を賜ったことを記す僖公九年のことである。ここで描かれるのは周王に対して敬意を払う桓公の姿であり、『左伝』は尊王に結びつけられた限りにおいてのみ覇業を評価すると、第三章に続けて著者は述べる。

ところで、桓公については、彼の死後に斉で起こった内乱のためにその亡骸が二ヶ月に渡って放置され、涌いた虫が部屋の外にまではい出したという逸話が先秦・漢代の諸文献に見えるが、『左伝』にこれは見えない。『左伝』はこれを省略したのだろうか。著者はこのような疑問から出発してこの逸話がどのように生まれたのかを探ろうとし、さらには『左伝』の曆法に関する仮説を提出する。それをごく簡略にまとめてみたい。

1. 春秋時代、各国は異なる曆を用いていたため、各列国史の中で同一事件を記述する際に季節・月・干支（以下では単に「日付」とまとめさせてもらう）に食い違いが生じた。

2. 『左伝』の第一次の編纂者は曆の違いに気づいており、

『春秋』に合わせて『左伝』を編集する際に、列国史の日付を『春秋』の曆の下に統一しようとしたものの、改修漏れが何箇所か残ってしまった。

3. それ以降の編纂者は、曆法の違いを知らず、第一次の編集で漏れた箇所を改修することができなかった。もしくは知ってはいいたがその時点ではもはや改修が不可能になっていた。『春秋』と『左伝』の間に残ってしまった日付の食い違いを整合させるために、編纂者は『春秋』が実際に事件のあった日付ではなく、魯に正式に報告のあった日付を記すという説明（「赴告説」）を『左伝』に書き加えた。

4. 桓公の死の日付は『春秋』では十二月乙亥、『左伝』では十月乙亥となっているが、これも改修漏れの一つであった。この二つは実際には同一の日付であるが、第二次以降の編纂者が赴告説による説明を付け加えた。

5. 『春秋』と『左伝』の読者である何者かが、この二書における日付のズレの意味を理解できず、桓公の死からかりもがりまでに二ヶ月の空白があったものと見なし、そこから虫の逸話が創作され、諸文献に記述されることになった。

著者はこのように論じ、複数の編纂者が存在したと考えられる『左伝』の「重層性」を改めて指摘する。さらに『左伝』の成立年代の問題にも踏み込む。以上の仮説が正しければ、桓公の最期に関する逸話を載せる最初期の文献の一つである『呂氏春秋』より以前に、「赴告説」を備えた『春秋』の伝としての『左伝』が成立していたというのが、その結論である。

第五章では、『左伝』中期の「重心」である晋と楚の三大戦のうち、最多の文字数を費やして記述される「邲之役」について論じられる。著者は「邲之役」のほぼ全文を訳によって引用し分析しているが、ここでも指摘しているのは『左伝』の記述が種々の史料から構成されていることである。著者はこれを諸国の公文書である「国史」と、後世から回顧してまとめられた伝承としての「史話」の二つに大きく分ける。例えば人物の発言についても、鄭の襄公が楚に降伏する際の上は鄭の国史によって伝えられたものと考えられるのに対し、楚との戦いを避けようとする晋の随武子の長い発言や、晋の敗戦を予言する知荘子の発言などは後世の修飾によるも

のとしている。また、「邲之役」の冒頭近くでは晋の三軍の指揮官である將と佐が実名で記されているが、これと同じものが『左伝』では何箇所もあり、晋の三軍を構成する人物の変遷がかなり詳細に調査できるが、これは国史に基づいたものであり、第一次史料に近いものであろうこと、ところがそれらの人物を諡号で記す箇所もあり、それは国史とは異なる史料に基づくであろうことが述べられる。著者は「史話の中には舞台劇を思わせるものも含まれるであろう」と述べ、その実例も一つ挙げているが、これは第一章を受けたものであろう。

著者は他に、同一事件の異聞を『左伝』がいかに処理しようとしたかという問題に言及しているのだが、これについては第六章で論じられる「同事異聞」を確認した後で改めて触れてみたい。

第六章では、『左伝』が記述する賢人政治家の時代で、時間的にその真ん中に位置する「弭兵之会」がまず引用・紹介される。「弭兵之会」とは、対立を続けていた晋・楚およびその盟下の国々の間で襄公二十七年に開かれた和平会議である。この会議における重要人物は、晋・楚それぞれの代表で

ある趙武と子木、および会議の斡旋者である宋の向戌である。しかし著者は、趙武の補佐として会議に参加した晋の叔向の言行が要所所で記述されていることを指摘し、「弭兵之会」の真の主役は叔向であり、「『左伝』が盟主としての晋の面目を保つような働きを叔向に担わせているように見える」と述べる。

また著者は、「弭兵之会」が『左伝』以外の文献にはほとんど現れないものの、この事件を記す『左伝』の伝文に詳細な日付が繰り返り返し現れることを指摘し、「弭兵之会」は第一次史料である「列国史」に基づくことが予想されるとしている。津田左右吉氏は「弭兵之会」そのものを『左伝』が創作した事件であると考えたが、著者はこのような理由から津田説を否定している。

「弭兵之会」という一つの事件における記述を確認した後、著者は『左伝』が記す後期における賢人政治家を一人ずつ取り上げ、『左伝』の中での彼らの記述とその意味を論じる。

取り上げるのは、前漢の劉向が『戦国策』叙録で五霸の時代以後の賢人として名を挙げた鄭の子産・晋の叔向・斉の晏嬰と、小野澤精一氏がそれに加えた魯の叔孫豹・呉の公子季札

の、合計五名である。

著者が特に注目する人物は鄭の子産である。第六章の第二節以下は全て子産に関して論じられ、この他の四人は第七章で論じられることになる。その理由は、『左伝』自身がこれらの人物の中で最も多くの文字を費やして子産を記述しているからである。著者によれば、この五人について「某曰はく」の形で示される発言の文字数は次のようになる。

子産	四、五二二字
叔向	三、〇四六字
晏嬰	一、八二一字
叔孫豹	八七九字
公子札	六八七字

この上に、行動の記述（記事文）が加わる。第二章で論じた「鄭之役」二、八二六字と比較しても際だつその多さを指摘し、著者は「かりに『左伝』の中心人物をただ一人選ぶとするなら、子産を措いて他にない」と述べる。

著者は、『左伝』が記述する子産の言動を一覧表にした鄭

克堂の仕事に手を加えた自作の「鄭子産年表」を載せた上で、子産の言動を「発言」と「行動」とに分けて分析している。

それによれば、子産の発言として目立つのが外交の場で発せられた「外交辞令」であり、晋・楚という両大国に挟まれた小国である鄭の政治家として、主に晋に対して向けられたものである。子産の「外交辞令」に一貫しているのは、古くは周の先王たちの命、近くは晋の文公の命に基いて述べる自己主張とのことで、著者はこれを「晋が自らを盟主と認める限り、これを受け容れざるを得ない仕掛け」と表現している。

そして、彼の「行動」に関しては、「為政」つまり政治の場での行動に着目している。『左伝』は子産の行った諸々の政治改革を記した後で、それに対する人々の称賛・非難双方の反応を述べる。著者によれば、『左伝』は子産の改革に一定の評価をしてはいるものの、そこに記された非難の声は『左伝』の立場を表すものである。そして、子産の改革は後世の法家思想の先駆であり、それに対する非難がまだ有効であった時代が『左伝』の成書時期であろうと、成立年代に関する指摘に及ぶのである。

また顧炎武の説を引いて、『左伝』には「同事異聞」、つ

まり同一事件の異伝が別々の箇所に記載されている場合があり、子産に関してもそれが見られることを指摘する。顧炎武はこれを左氏（この場合は『左伝』編纂者というべきか）のミスと見なしており、著者もそのことには異論を唱えていない。ただ、著者が新たに提起するのは、『左伝』の中には「異時兩事」も存在するのではないかとということである。つまり、本来は同一事件であったことを、『左伝』が意識的に別々の箇所に記して二つの事件に仕立て上げようとした、というのである。子産に関するそのような例を一つ挙げ、著者は「子産に関わる史話を博搜しようとする『左伝』の意図のしからしむるところではなかったろうか」と述べている。著者がここでいう「異時兩事」とは、文脈上の要請によって行われるものであると評者は理解した。この第六章では、それが年を隔てて記述される場合について論じられているのだが、第五章では同じ年にそれが記述される例が取り上げられている。ここで、第五章で論じられた「邲之役」について振り返ってみたい。「邲之役」では、戦いの前の挑戦の場面を記し、楚から晋への、晋から楚への挑戦がそれぞれ描かれるのだが、その二つは重複した筋書きを見せる。それは、挑戦者が敵兵

に追いかけていたところに獸が飛び出す。挑戦者がそれを射止めて敵兵に口上とともに献上したところ、敵兵が追撃を止めるといふものである。著者はこれについて、『左伝』はこれらをまとめて記述しようとしたものの、うまく処理できなかったかに見えるのである」と述べており、これを「異時兩事」とは見なしていないようだが、これらの場面はどのように理解するべきだろうか。『左伝』は「鄆之役」について晋と楚の陣容を交互に記述し、双方の陣営に主戦論と非戦論の対立があったことを示している。評者は挑戦の場面の重複について、むしろ晋と楚の陣営双方を描こうとする『左伝』の編纂者が、文脈上の要請から意図的に行つたものではないかと考える。

また、著者は指摘していないが、「鄆之役」には重複を思わせる箇所が他にもある。晋の趙旃という人物が、楚兵に追いかけて林の中に逃げ込むという場面が二回記されているのがそれである。これも、もともとは一つの出来事であったのが別々の箇所に記されたという可能性が考えられる。もしそうならば、これは著者のいう「同事異聞」と「異時兩事」のどちらに当たるのであるか。この趙旃について、『左氏

会箋』は「纒かに能く林より反り、乃ち又た林に走る。此の人専ら林に走るを以つて能と為す。鼠態笑ふべし」と評しているが、もし林への二回の逃走が「同事異聞」、つまり『左伝』編纂者のミスによるものだとしたら、『会箋』の評はその上に成り立つた深読みということになりかねない。もつとも、評者はこの重複も『左伝』の意図的な操作と見なしたい。評者がここで述べたのは、「同事異聞」と「異時兩事」の判別には慎重な検討が必要であるという確認に過ぎない。『左伝』を読む者が同一事件の重複の存在を意識しなければ時に附会に陥る可能性がある。そのためにこの問題について、少し言及しておきたかったのである。

著者は、子産を含めて『左伝』に記された外交辞令には共通した語彙が使われ、その語彙が外交以外の場面で使われるときは別の意味を持つことや、特に子産の辞令の中に道徳的・思想的な用語が見えないことを指摘し、これらの辞令が第一次史料に近いものであると述べているのだが、この辺りの説明はやや駆け足で分かりにくいと感じた。より詳しい解説を求めたい部分である。

第七章では、子産以外の四人についてその言動が検討され

る。

まず、晋の叔向については、彼の外交辞令や行動が晋の国君や執政の代弁者として記述されていること、「弭兵之会」で見たように諸国の盟主としての晋の面目を保つ役目が彼に担わされていることが確認される。そして、現実的・具体的な子産の発言に対して、叔向の発言は第三者的な、礼制に基づいた道徳的判断であり、それは『左伝』の立場と重なるということが述べられる。さらには、子産の改革を批判する叔向の立場は、過ぎ去った「春秋」という時代を回顧する『左伝』の立場と重なり、加えて『左伝』は晋の公室が衰え三晋が興るといふ事実を遡って予言の形で叔向に語らせていると述べている。

斉の晏嬰については、「民に君たる者は、社稷を主る」「君に臣たる者は、社稷を養ふ」といふ彼の言葉が、『左伝』自身の君臣観であること、『左伝』は晏嬰に、叔向と同様に斉の公室の衰えと田斉の興隆を予言として語る役割を担わせていることが述べられる。

魯の叔孫豹については、子産と同様に、盟主である晋に対して周の礼制を根拠とする辞令を弁じており、それが周の文

化伝承に重きを置く『左伝』の立場でもあると述べる。また、叔孫豹が「不朽」とは何かについて述べた発言（襄公二十四年）の中で「立德」「立功」「立言」の三つの概念が見えることに着目し、叔孫豹は「立德」「立功」の時代はすでに過ぎ去り、当代は「立言」の時代、つまり賢大夫が国の運命を担って行動し、発言する時代であると表明しているのであり、これは『左伝』編纂者が意図的に行つたもので、叔孫豹の言葉に『左伝』の後半が賢大夫の時代であることを宣言する役割を担わせていると論じる。著者はここに至って、賢大夫の言葉を記録することが『左伝』の目的の一つであると主張するのである。

以上紹介してきたように、『左伝』の後半部分は賢大夫の時代として描かれており、子産・叔向・晏嬰・叔孫豹の四人の賢大夫にはそれぞれ『左伝』が自らの立場の代弁者として役割を担わせているというのが著者の考えである。そして、呉の季札はこれら四人全てと交流を持ち、彼らに忠告を与え人物として記されており、彼の役割は中原から遠い呉の間という准客観的立場から賢大夫を展望・批評するものであるという。著者が最後に注目するのは孔子である。『左伝』



は子産と叔向に対する孔子の批評を複数回記しているが、孔子の役割は国も時代も超えた、『春秋』の時代全てを見通す批評者としてのそれであり、その批評を記すことで賢大夫の時代を記すという『左伝』の目的を示しているのだとする。ここまで見てきたように、『左伝』の「機軸」は「賢大夫説話」であり、それを示すために用意された「構成」は右に述べた通りであると著者は考えている。

第八章では、これまでの内容がまとめられ、参考文献が示される。著者は、本書はまず『左伝』の特徴的な部分を見出し、その部分に絞って議論を進めたため、言及しないままの問題が少なからず残ってしまったと述べ、参考文献を紹介することでそれらにも触れようとする。先行研究の内容がまとめられており、『左伝』に関して議論されてきた問題について知るためには大変便利である。

以上で本書評を終えるが、初めに述べたように、評者の中国哲学に関する無知のために勘違いや見落としがあることを恐れる。また、評者自身の興味に引きつけて読んだため、本書の議論の筋道から外れた箇所もあると思われる。合わせて著者の寛恕を乞いたい。